



HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|------------------|---|
| Title | 京都府における「継続的サイエンスカフェ」はどのように継続してきたか：サイエンスカフェ運営上の課題に着目して |
| Author(s) | 北原, 雄太; Kitahara, Yuta |
| Citation | 科学技術コミュニケーション, 38, 1-16 |
| Issue Date | 2026-03 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/2115.99289 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/99289 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | JJSC_38_02_kitahara.pdf |



論文

京都府における「継続的サイエンスカフェ」は どのように継続してきたか ～サイエンスカフェ運営上の課題に着目して～

北原 雄太¹, 川上 雅弘¹

How “Continuous Science Cafes” have been Sustained in Kyoto Prefecture?:

Focusing on the Issues in Running the Science Cafe

KITAHARA Yuta¹, KAWAKAMI Masahiro¹

要旨

サイエンスカフェの運営において、開催場所の確保や話題提供者の選定・依頼、集客、運営資金、運営者側の負担などが課題（解決が必要な問題）として言及される。本研究では、継続的に開催されたサイエンスカフェ（継続的サイエンスカフェ）が、これらの課題にどのように向き合っていたかを明らかにすることを目的に、京都府内の10件の継続的サイエンスカフェの運営者にインタビュー調査を実施した。調査の結果、サイエンスカフェの継続性に影響を及ぼした因子には、コロナ禍でのオンライン開催や、運営者の忙しさが挙げられた。他方、サイエンスカフェ開催の課題とされていた開催場所の確保や話題提供者の依頼、集客などは主だった課題になっていなかった。また、これらの背景には、サイエンスカフェの開催に理解を示す協力者（団体）の存在や、研究者や学術に対する市民の関心が見られ、京都という学術都市としての地域性がサイエンスカフェの継続性に寄与したことが考えられた。さらに、継続的サイエンスカフェは、研究の広報手段ではなく、科学に関わる話題を純粋に楽しんだり、参加者どうしや研究者との双方向性や研究者の研鑽を意識して開催しており、これらが継続性を支える要素となったことが考えられた。

キーワード：サイエンスカフェ、継続性、開催記録、インタビュー調査、京都府

ABSTRACT

When holding a science cafe, it is said that finding a place to hold the cafe, selecting and requesting speakers, attracting visitors, operating funds, and the burden on the organizer are some challenges. In this study, we interviewed the organizers of 10 continuous science cafes in Kyoto Prefecture to clarify how these issues were addressed by the science cafes that had been held continuously. The results indicated that the challenges that affected the continuity of the science cafes were holding the cafes online during the COVID-19 pandemic and the fact that the organizers became busier. On the other hand, finding a place to hold the cafe, selecting and requesting speakers, and attracting customers, which are generally regarded as challenges in holding a science cafe, were not major

2025年3月26日受付 2025年10月3日受理
所 属：1. 京都産業大学生命科学部産業生命科学科
連絡先：mkawakami@cc.kyoto-su.ac.jp

issues and did not affect the continuity of the science cafe. In addition, the reasons for the continuous holding of science cafes were thought to be the understanding of research activities by the organizations and citizens who cooperate in holding science cafes in Kyoto. The continuous science cafe was not a means to draw people's attention to research activities, but rather a way to enjoy science-related topics, interactivity among participants and with researchers, and a conscious effort to improve the communication skills of the researchers. These factors made the science cafe an ongoing event.

Keywords: Science Cafe, Continuity, Event Records, Interview investigation, Kyoto Prefecture

1. 問題の所在

日本でのサイエンスカフェは2004年10月に京都市にて、NPO法人「日曜大学」により始まったとされる(中村2008)¹⁾。翌年の2005年は、サイエンスカフェの立ち上げが各地に広がったことから、「サイエンスカフェ元年」と呼ばれ、それ以来、全国各地で様々なサイエンスカフェが行われてきた。杉山(2007)や中村(2008)によると、サイエンスカフェの主催者や主催団体、実施の規模、内容、目的などは、多岐に及ぶという。この見解は、日本におけるサイエンスカフェの草創期を概観しての言及ではあるが、20年が経過した現在も当てはまるだろう。他方、サイエンスカフェの継続性に着目した三島他(2022)に見られるように、複数年にわたって継続的に開催していることも珍しくはない。中には10年以上も継続するサイエンスカフェも存在する。多様性に加え継続性もまた、サイエンスカフェをめぐる今日的な特徴のひとつである。

翻って、サイエンスカフェの実践報告や研究をめぐっては、特定のサイエンスカフェを実施した際の個別的・経験的な記述にとどまることが多いと考えられている(小林他2022)。そのような状況下、前述した三島他(2022)では、2006年から2019年の間に福岡県で開催された「継続的サイエンスカフェ」²⁾の実施事例を収集し「ある地域でどのようなサイエンスカフェがどの程度継続開催されているのか」というリサーチ・クエスチョンを通じて、運営の主体が「研究者」であること、特定の会場を有することが、継続性に寄与していることを示唆した。この点、個別事例としてのサイエンスカフェの実践を超えて、地域単位で全体像や特徴を明らかにした先駆的な研究であると言えよう。

他方、全国のサイエンスカフェ実施者に対して成果や課題の調査を行った平山(2014)によると、サイエンスカフェの課題として「参加者の固定化、周知・広報の難しさ(45/88団体)」「経費、施設確保、運営者側の負担(38/88団体)」「対話の質、少なさ、形骸化、マンネリ化(25/88団体)」「話し手の確保、選定、依頼、固定化、負担(15/88団体)」などが挙げられている。また、「サイエンスカフェ新潟」を運営する本間(2010)は「サイエンスカフェで問題となるのは、ゲスト、会場、経費、広報と言われる」と指摘しており、サイエンスカフェを実施する際の課題であることが示唆される。さらに、「ペンギン・カフェ」の運営者である紺屋(2008)は、場所の確保や広報による集客、労力・経費の削減、サイエンスカフェ本番「ゲストからの発信に偏ること」も課題であるという。

しかし、継続的に開催されてきたサイエンスカフェは、上記に挙げた課題に対して何かしらの対処により解決してきたのではないだろうか。また、先に示したこれらの課題は、継続的に開催しているサイエンスカフェにとって、そもそも解決が必要な問題として顕在化していなかったかもしれない。だからこそ、継続的な開催が可能であったのではないだろうか。これらの疑問と先行研究の検討より、「継続的サイエンスカフェ」が、多くのサイエンスカフェ運営者が指摘している課題にど

のように向き合っていたのか（何を課題としてどのようにして解決できているのか、あるいは対処しようとしたのか、逆に指摘されている課題が、どうして課題になっていないのか）に着目することで、サイエンスカフェの継続性を支える要因やこれまでには指摘されていない運営上の工夫が明らかになることが考えられる。

日本でサイエンスカフェが最初に始まったとされる京都には、大学や研究機関、研究者や学術機関に従事する職員が他の都市に劣らず少なくない。ノーベル賞受賞者を多数輩出し、学術全般に対する行政の理解や支援、市民の関心も少なくないと考えられる。京都においても「科学を人々の文化の中に位置付ける」ための土壌は広がっており、これまでに数多くのサイエンスカフェが実施されてきた。しかし、京都府におけるサイエンスカフェの取り組みを俯瞰的に記録し、全体的な特徴や傾向を可視化した研究事例は管見の限り見当たらない。三島 他 (2022) と同様に、今日に至るまでのサイエンスカフェの実施事例を網羅的に調べ記録することは、京都府という特定地域における「科学コミュニケーション活動の根付き」を明らかにする点で意義があると考えられる。また、本研究の目的を遂げることにより得られるサイエンスカフェの継続性を支える知見を示すことは、京都府または他地域における今後のサイエンスカフェおよび科学コミュニケーションの持続ならびに発展に寄与する情報を提供することができると思う。

以上を踏まえ、本研究では、京都府における「継続的サイエンスカフェ」がサイエンスカフェ運営における課題にどのように向き合っている（きた）のかを明らかにすることを目的に、「継続的サイエンスカフェ」の運営者へのインタビュー調査を行った。

2. 方法

2.1 調査対象の選定

京都府における「継続的サイエンスカフェ」は「サイエンスカフェ・ポータル」³⁾を参照して抽出した。対象期間は2006年から、2023年12月までとした。「継続的」の定義は、三島 他 (2022) と同様に「複数年にわたって10回以上開催している（いた）」とした。また、「サイエンスカフェ」（「サイエンスバー」を含む）は三島 他 (2022) を踏まえつつ以下に定義した。下記基準を満たすか否かは活動ブログやWebページ、インタビューの実施により判断した。

- (1) 幅広い市民を参加者として受け入れている、公開性のある会場設定をしている、飲食付である、実生活と関連性のあるテーマを設定するなど、気軽に参加できる工夫が施されている（いた）。
- (2) 主催者自身が、講演会とは異なる形態・目的で開催している（いた）。

結果、19件の「継続的サイエンスカフェ」を抽出した。本研究では、現在または過去に一定期間、企画・運営に携わった方（「運営者」）にインタビューを実施した。運営者と連絡が取れない場合、そのサイエンスカフェの実施当初より毎回継続して関わった話題提供者を対象とした。企画・運営の担い手が実施年度によって異なることがある場合は、現在連絡が取れる担当者を対象とした。

2.2 調査方法

本調査では、本研究のメジャー・リサーチ・クエスチョン（MRQ）を明らかにするため、「継続的サイエンスカフェ」の運営者に対して、以下の三つのサブシディアリー・リサーチ・クエスチョン（SRQ）に基づいた半構造化インタビューを実施した。平山 (2014) による質問紙調査と異なり、課題（解決が必要な問題・障壁）が生じている背景や、課題とはなっていない理由・背景について、二次的・三次的な質問により明らかにすることが可能であることからインタビュー調査を採用した。

MRQ：「継続的サイエンスカフェ」はサイエンスカフェ運営における課題にどのように向き合っ

てきたのか。

SRQ1:サイエンスカフェを運営する上で、何が、なぜ、課題だったか。

SRQ2:その課題をどのように解決することができたか。たとえ解決に至らなくともどのように対処したか。

SRQ3:何が課題として生じなかったか。それはなぜか(「継続的サイエンスカフェ」のどのような条件・構造が作用して、ある課題は課題として表面化していないのか)。

インタビューでは平山(2014)の質問紙を参照し、開催場所の確保、話題提供者の選定・依頼、集客、運営者側の負担、運営資金の確保、マンネリ化、オンラインでの開催等を「課題となりうる項目群」として設定した。その上で、これらの項目群が実際に課題だったのか否か、また、どのように解決・対処が可能だったのかを運営者に尋ねた。また、継続性に影響すると思われるその他の項目も尋ねた。協力者(団体)の有無や、それらとどのような関わり合いがあるのか、サイエンスカフェに携わる運営者自身の内面的動機の有無、開催にあたっての属人性の有無、開催を阻む要素・開催を止めた理由などである。

そしてインタビューを行った際には、インタビューガイドに則りつつ、各サイエンスカフェの実施形態や継続性に応じた質問を行った。例えば、開催場所を確保することへの障壁・困難の有無を確かめるために、特定の場所を開催場所とした理由や、開催場所を移転した(せざるを得なかった)理由、毎回あえて異なる場所で開催することが可能な理由などについて質問した。インタビューの実施時間は概ね1時間から1時間半ほどである。また、対面(任意の場所)またはオンラインにより、一名あるいは二名の調査協力者を対象に実施した。インタビューの後、回答が不十分と感じた内容や追加の質問についてはメールを用いて、追加で質問を行うこともあった。なお、本調査の実施期間は2024年10月から12月である。

また、インタビュー調査に先立ち、先行研究(三島 他, 2022)を参照して、京都府における「継続的サイエンスカフェ」の運営者を「研究者」・「非研究者」に分類した。また、「特定」の会場で実施しているか否かについて分類した⁴⁾。

2.3 分析方法

10件の「継続的サイエンスカフェ」より得られたインタビュー記録を書き起こし、その書き起こし記録から各々のサブシディアリー・リサーチ・クエスチョン(SRQ1~3)に当てはまる記述を抽出した。また、サイエンスカフェの継続実施に寄与していると思われる要素や、開催が途絶えるなど継続性に影響した要素を抽出した。

次いで、10件の「継続的サイエンスカフェ」を運営主体で2つに区分した。この区分は、個人または個々人の集まりで開催しているものと、サイエンスカフェの開催が、運営母体となる組織(大学や研究所、企業など)の中に位置付けられるものである。また、課題となりうる項目ごとに対象ケースを設定した。例えば、「場所の確保」については、運営者(運営組織)が会場を自前で有しているケースと、会場を有していないケースに類型化した。会場を自前で有している場合、場所の確保に困難や障壁は生じにくいことが考えられる。また、「話題提供者の選定・依頼」については、中心となる運営者が「研究者」であるケースと「非研究者」であるケースの2つに類型化した。中心となる運営者が「研究者」である場合、話題提供者(研究者)の確保は容易になると思われる。このように、10件の「継続的サイエンスカフェ」を、運営主体と課題発生の可能性に基づく対照的な区分(課題が生じやすい/生じにくい)で類型化した。その上で「課題となりうる項目群」の実際の有無や、課題が生じた・生じなかった背景を分析した。

2.4 倫理的配慮に関する事項

調査協力者に対しては、事前に電子メールにて本研究の目的や方法が記載された「研究説明書」を示した。インタビュー開始前には再度口頭にて説明し、書面にて同意を得た。また、研究参加に関する事項として、同意した後も撤回可能であること、発言した個人が特定できる形での公表は行わないこと、個人が特定される可能性がある情報の利用が不可欠と判断した場合、参加者本人より許可を得ることを伝えた。本研究は京都産業大学研究倫理委員会より承認を得た（承認番号：京産大倫理第0249号）。

3. 結果

3.1 京都府における「継続的サイエンスカフェ」とその運営者による分類

「サイエンスカフェ・ポータル」³⁾を参照して抽出した京都府におけるサイエンスカフェは2006年1月から2023年12月までの期間に計84件認められた。このうち「複数年にわたって10回以上継続的に開催していた」という「継続的サイエンスカフェ」の定義に当てはまるサイエンスカフェは19件認めることができた。この詳細は表1としてまとめた。また、京都府における「継続的サイエンスカフェ」の開催期間を整理して示したものが図1である。

次に京都府における「継続的サイエンスカフェ」19件の運営者を分類して整理したものを表2に示す。「継続的サイエンスカフェ」19件のうち、中心となる運営者を「研究者」として分類したケースは4件で、「研究者」・「非研究者」ケースは6件であった。このことから、研究者が運営に携わるケースは10件である。ただし、分類上「研究者」に含めたが、この中には元研究者が担うケースも3件含まれている。また、「研究者」・「非研究者」ケースは、福岡県では16件のうち1件が該当したのと比べ、京都府の「継続的サイエンスカフェ」では19件のうち6件という結果であった。他方、「非研究者」として分類したケースが9件であり、そのうち、大学や研究所などの学術機関がサイエンスカフェ開催の母体となっていたり、組織内の職員が運営を担うケースが5件見られた。また、残りの4件については、企業やお店のオーナーと思われる人物が主催するケースであった。これら「非研究者」ケースの運営には、いずれも研究者は関わっていない。また、表1によると、京都府にて「特定」の会場で開催している（いた）「継続的サイエンスカフェ」は19件のうち16件だった。

3.2 インタビュー調査の協力者について

インタビュー調査の結果を示すにあたり、調査対象となった10件の「継続的サイエンスカフェ」の中心的な運営者と運営母体の関係と調査協力者の属性を表3及び表4で示す。表3は、先行研究（三島 他, 2022）を参照して、中心となる運営者が「研究者」/「非研究者」である2つのケースに類型化して作成した。中心となる運営者を「研究者」に分類できたケースは6件で、このうち組織が主催する場合（A）が2件、個人または個人による運営体制である場合（B）が4件であった。一方、中心となる運営者を「非研究者」に分類したケースは4件で、そのうち学術機関が主催する場合（C）が2件、学術機関ではない組織が主催する場合（D）が1件、個人または個人による運営体制である場合（D'）が1件であった。表4では、さらにインタビューの調査協力者（a~j）が表3のどのカテゴリーに該当していたかを示すとともに、調査協力者が関わったサイエンスカフェが特定の開催場所を有していたか、有していなかったかが分かるように整理した。

3.3 開催場所（会場）の確保

調査対象とした10件の継続的サイエンスカフェで、運営者又は運営組織が会場を自前で持つケー

表1 京都府における「継続的サイエンスカフェ」の一覧

| No. | サイエンスカフェの名称 | 開催記録 | | | | | 特定/ 不特定 | 会場 名称・内容 | 運営者 | |
|-----|------------------------------------|----------|-----------|----------|---------|-------------|------------|--|--|--------------|
| | | 初回 年月 | 最終回 年月 | 継続 約年 | 総 回数 | 頻度 (回/年) | | | 主催名 | 中心となる 運営者 |
| 1 | 科学カフェ京都 | 2006.2 | 2023.12 | 17.9 | 174 | 10 | 特定 | 京都大学理学研究科セミナーハウスほか | 科学カフェ京都 | 研究者・非研究者 |
| 2 | けいはんなサイエンスカフェ | 2006.2 | 2023.8 | 17.6 | 91 | 5 | 特定 | けいはんなプラザ | 関西化学術研究都市推進機構 けいはんな新産業創出・交流センター | 非研究者 |
| 3 | 井戸端サイエンスカフェ | 2006.4 | 2015.12 | 9.8 | 34 | 3 | 特定 | カフェ進々堂 | 井戸端サイエンス工房 | 研究者・非研究者 |
| 4 | 農芸化学会サイエンスカフェ | 2007.4 | 2023.1 | 12.1 | 21 | 2 | 不特定 | 飲食店など | 公益財団法人日本農芸化学会関西支部 | 研究者・非研究者 |
| 5 | 三省堂サイエンスカフェ in 京都 | 2007.4 | 2014.2 | 6.9 | 13 | 2 | 不特定 | 京漬物味わい鬼「西利」(第1回~9回) ほか、複数の飲食店(第10回~13回) | 三省堂書店 (三省堂サイエンスカフェ事務局) | 非研究者 |
| 6 | iCeMS カフェ | 2008.3 | 2016.10 | 8.6 | 18 | 2 | 特定 | iCeMS 本館交流ラウンジほか (複数の特定の会場で開催していた) | 京大物質細胞統合システム拠点 | 研究者 |
| 7 | お寺で宇宙学 | 2010.7 | 2023.11 | 13.5 | 36 | 3 | 特定 | 真宗大谷派小野寺浄慶寺ほか | お寺で宇宙学実行委員会 | 研究者・非研究者 |
| 8 | アストロノミー・カフェ | 2011.12 | 2019.12 | 8.1 | 72 | 9 | 特定 | 京都産業大学 神山天文台ホール | 京都産業大学神山天文台 | 非研究者 |
| 9 | CIRA カフェ | 2011.1 | 2023.7 | 12.6 | 34 | 3 | 特定 | 京都大学 iPS 細胞研究所ほか (その他の場所でも開催) | 京都大学 iPS 細胞研究所 国際広報室 | 非研究者 |
| 10 | 語ろう! どうぶつ (いちなんサイエンスカフェ) | 2011.2 | 2014.2 | 3.1 | 23 | 7 | 不特定 | 飲食店 | 語ろう! どうぶつ | 研究者・非研究者 |
| 11 | 「星空教室」および 「Lagado 研究所サイエンスカフェ」 | 2012.7 | 2013.6 | 1.0 | 14 | 14 | 不特定 | 出町柳三角州鴨川デルタ, Lagado 研究 所, ゲストハウストンボほか | 京都市左京区にある天文小道具屋 「Lagado 研究所」 | 研究者・非研究者 |
| 12 | 畳にコタツで膝詰め対話 | 2012.3 | 2023.9 | 11.6 | 69 | 6 | 特定 | 京都大学吉田キャンパス 100 周年時計記 念館 (その他の場所でも開催) | 京都大学学術研究展開センター (KURA) | 非研究者 |
| | ちゃぶ台開いで膝詰め対話 | 2012.9 | 2014.9 | 2.1 | 15 | 7 | | 京都大学吉田キャンパス 100 周年時計記念館 | | |
| | オンラインでも膝詰め対話 | 2020.12 | 2022.6 | 1.6 | 16 | 10 | | オンラインでの開催 | | |
| 13 | エコール・ド・東山 | 2012.11 | 2015.7 | 2.8 | 19 | 7 | 特定 | ハイアットリージェンシー京都 BIF Touzain バー 京都市東山区 | 京都大学大学院 若き研究者グループ エコール・ド・東山 | 研究者 |
| 14 | meme で科学バー | 2013.12 | 2020.5 | 6.5 | 22 | 3 | 特定 | お酒と、ときどきトルコ meme | 「お酒と、ときどきトルコ meme」 | 非研究者 |
| 15 | サロン・ド・科学の散歩 (2013~) | 2013.6 | 2014.1 | 0.7 | 15 | 23 | 特定 | NPO 法人アインシュタイン事務所 | 基礎科学研究所 (NPO 法人知的人材ネットワーク・ あいしんしゃたいん 附置機関) | 研究者 |
| | サロン・ド・科学の探索 (2014~) | 2014.10 | 2018.1 | 3.3 | 38 | 11 | | NPO 法人アインシュタイン事務所 | | |
| | サロン・ド・科学の眼差し (2019~) | 2019.4 | 2023.12 | 4.8 | 23 | 5 | | ルイ・パスツール医学研究センター ほか、オンライン (2021~) | | |
| 16 | サイエンスカフェ@京都市動物園 夜の図書館カフェ DE トーク | 2015.12 | 2020.2 | 4.3 | 50 | 12 | 特定 | 京都市動物園正面エントランス 図書館カフェ | 京都市動物園 生き物・学び・研究センター | 研究者 |
| | 動物園 DE サイエンストーク | 2020.7 | 2023.11 | 3.5 | 35 | 10 | | 京都市動物園 | | |
| 17 | 赤ちゃん学カフェ | 2016.9 | 2023.12 | 7.3 | 32 | 4 | 特定 | 同志社大学赤ちゃん学研究センター (木津川市) | 同志社大学赤ちゃん学研究センター | 非研究者 |
| 18 | 京都・出町柳サイエンスバー | 2016.9 | 2019.12 | 3.8 | 12 | 3 | 特定 | ワインビストロ・アシユルルク | ワインビストロ・アシユルルク | 非研究者 |
| 19 | ふれデミックカフェ@ KRP with 京大オリジナル | 2020.8 | 2023.12 | 3.4 | 37 | 11 | 特定 | 京都市動物園 (KRP) | 京都リサーチパーク株式会社 イノベーションデザイン部 | 非研究者 |
| | ふれデミックカフェ@ KRP with 立命館大学 | 2020.9 | 2023.7 | 2.9 | 25 | 9 | | | | |

※ 表の作成は先行研究 (三島 他, 2022) に依拠した。継続約年は総継続月数 (別に算出) を 12 で割り求めた。また、開催頻度 (一年あたりの開催回数) は「総回数/継続約年」より算出した。いずれの値も四捨五入した。初回年月で 2006 年以前より開催を続けていた場合、および、最終年月を超えて継続している場合、アンダーラインを付した。定年退職した元研究者が中心となる運営者であった場合は「研究者」に含めた。「運営者が特定の場所での開催を予定しているサイエンスカフェ」を「特定」、それ以外を「不特定」として分類した。加えて、継続期間中、複数の場所で開催している場合、10 回以上同じ場所で開催したことがあるものは「特定」の会場を有するとみなした。

すと、会場を自前で持たないケースに類型化した。その結果、「会場を自前で持つケース」は 5 件であった (a, g, h, i, j)。この場合、運営者 (組織) が属する研究機関や学内施設、個人が経営する店舗などを利用していった。結果として、いずれも課題とはならず、継続性への影響はなかった。他方、「会場を自前で持たないケース」も 5 件であった (b, c, d, e, f)。この場合、会場使用に協力が得られるお店や大学、協力者 (団体) の存在により会場を確保していた。事例を挙げると、大学の近くにあつて日頃から学生や研究者を「温かく見守ってくれる」お店をお願いをすると快く協力していただけた (e)。また、会場の関係者 (複数人) が中心となる運営メンバーとは別に「実行委員」として携わることや (d)、生涯学習の場を主宰する団体が共同して運営にも関わり、会場の選

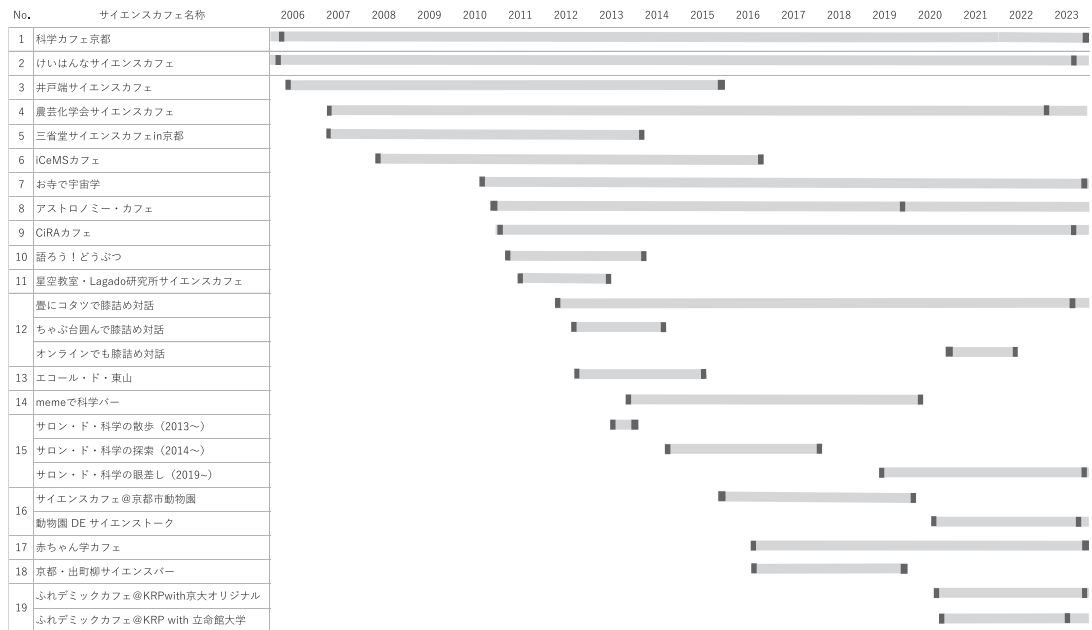


図1 京都府における「継続的サイエンスカフェ」の開催期間

表2 京都府における「継続的サイエンスカフェ」の運営者に関する分類

| 中心となる運営者 | サイエンスカフェ名称 |
|----------|---|
| 研究者 | サロン・ド・科学, サイエンスカフェ@京都市動物園, iCeMS カフェ, エコール・ド・東山 |
| 研究者・非研究者 | 科学カフェ京都, 農芸化学会サイエンスカフェ, お寺で宇宙学, 井戸端サイエンスカフェ, 語ろう! 動物, 星空教室 |
| 非研究者 | CiRA カフェ, ふれでミックカフェ@KRP, 膝詰め対話, 京都・出町柳サイエンスバー, memeで科学バー, けいはんなサイエンスカフェ, 赤ちゃん学カフェ, 三省堂サイエンスカフェ in 京都, アストロノミー・カフェ |

表3 中心的な運営者【「研究者」(「研究者」・「非研究者」ケース含む) / 「非研究者」】と運営母体との関係 (n: 該当件数)

| 中心となる運営者/運営母体 | 組織 (学術/非学術) | 個人または個々人 |
|---------------|---------------|----------|
| 研究者 (計6件) | A (n=2) (学術) | B (n=4) |
| 非研究者 (計4件) | C (n=2) (学術) | D' (n=1) |
| | D (n=1) (非学術) | |

表4 サイエンスカフェの属性と該当する調査協力者

| サイエンスカフェの属性 | A | B | C | D | D' |
|----------------|---|------------|------|---|----|
| 調査協力者 (開催場所あり) | a | - | g, h | i | j |
| 調査協力者 (開催場所なし) | b | c, d, e, f | - | - | - |

定を担っていたケースがあった (b). さらに、「研究者」の知人を介して会場を確保していた事例もあった (c). 翻って、「特定」の会場にて開催を継続していたものの、会場を使用できなくなる（協力を得られなくなる）ことで開催が途絶えた事例も 1 件あった (f).

3.4 話題提供者の選定・依頼

中心となる運営者が「研究者」/「非研究者」である 2 つのケースに類型化した表 3 に示すように、中心となる運営者が「研究者」であるケースは 6 件あった。そのうち、研究者が所属する学会や大学などが主催する場合、その組織内の研究者を話題提供者として選定・依頼することは容易であった (a, b)。また、個人または個人々々による運営体制である場合も、運営者（研究者・元研究者）の人脈により、研究者を話題提供者として選定・依頼することは容易であった (c, d, e, f)。同様のことは、中心となる運営者が「非研究者」でありながら、学術機関が主催する場合にも当てはまった (g, h)。以上に挙げたすべてのケースで、話題提供者の選定・依頼の課題は生じていなかった。加えて、上記以外の学術機関ではない組織が開催するケースおよび、非研究者であり個人が開催するケースである場合でも、特定の研究者との個人的なつながりや、学術機関の協力の下、話題提供者を確保していた (i, j)。それでも当初は、運営者が課題と認識していたケースもあった。例えば、学術機関に所属する研究者らにとって、科学コミュニケーションの研鑽を積む場としてサイエンスカフェは開催されていたのにも関わらず、研究者の関心は少なく、話題提供者としての自発的な協力を得ることに困難を抱えたという。しかし、参加してよかったという「成功体験」が組織内の研究者間に浸透した結果、慢性的な課題とはならずサイエンスカフェは継続した (a)。

3.5 集客

集客に注力しているケースと、注力していないケースに類型化したところ、「注力あり」は 3 件であった (a, h, i)。いずれも組織が主催し、開催当初において周知を広げることや、そのサイエンスカフェの開催目的に合致する参加者層の取り込みが背景にあった。ただし、いずれも開催当初より一定の参加者数を獲得していた。インタビュー記録からは、回を重ねるごとに知名度が上昇してサイエンスカフェの開催が市民に浸透したと感じられたことや、常連客が存在したこと、さらには、新聞社が開催予定を記事にしてくれたことなどの効果もありホームページに開催案内を出せば自然と参加者は集まってきたことが言及された。

また、「注力なし」と分類した 7 件 (b, c, d, e, f, g, j) は、いずれもウェブサイトなどで開催の案内を出せば一定の参加者が集まっていたことなどを理由に、集客を課題と認識していなかった。この「注力なし」ケースでは、SNS や Web ページでの開催案内の発信、過去参加者へのメールなど、基本的な周知・広報を行うこと以外の周知活動をしていないばかりか、その必要がないといった言及もあった。例えば、「5 人とかだったら困るけど、15 人ぐらいだったら別にいいかみたいなのところはありますしね。そんなにお客さんを集めなければいけないみたいなの、そういうプレッシャーとかっていうのは、あまりない」(e) ことや、「(広報手段として) 結局いつもホームページに出すのと、あと、サイエンスカフェとかの情報を出しているところ、サイエンスポータルとかそういうところに載せるぐらいで、それ以上あまり変わってないんですよ。言っても、20~30 人のキャパなんでそこまで広報を頑張らなくても集まってしまう」という回答があった (g)。

さらには、参加者が数人であったとしても開催していた・可能だったとみられるケースも見られる。「議論をするということが目的であれば、人数が多すぎるとちょっとできなくなる。そういう意味ではね、確かに 7, 8 人ってちょうどいいかも。ちょうどよかったんですよ。5 人になった時とかありますけども、それはそれで適正」だったという (f)。なお、参加者数が数人でも継続してい

た(サイエンスカフェの成立に問題はなかった)が、会場となるお店側にとっては集客を意識していた側面もあったという次のような事例も見られている(j)。

実際の参加者数は「多くて5人くらい、少ないと3人とか2人」であったが、話題提供者にとってはサイエンスカフェの開催に参加者数は関係しない。しかし会場となるお店の席数(数十人)に比べると少ないため、サイエンスカフェを開催することで営業中の店内が事実上貸し切りになってしまったという。普通にお店に来るお客さんが来にくくなってしまいう事態が生じた。そのため、開催の頻度は下がってしまったという。「貸し切りにした時に(サイエンスカフェに)何人お客さん来るかって、お店の方(=運営者)は計算しちゃうから、それはありますよね」。

3.6 準備・企画への負担

協力者(団体)と連携するケースと、連携していないケースに類型化したところ、協力者(団体)と連携するケースは9件あり(a, b, c, d, e, f, g, i, j)、場所の確保や広報、話題提供者の選定・依頼、資金の提供などの準備・企画の一部を担っていた。なお、協力者(団体)とは会場を提供する飲食店や、「非研究者」が「研究者」と共同して主催する場合も含めている。インタビュー調査からは、「准教授とか助教の先生ってあんまり喋る機会がないみたいで、一般の方とお話をする機会を設けていただけなのは、ありがたいと言っていた」(i)ことや、「お店っていう場所をお持ちなので、例えばそういうところに来たことがない人が来るチャンスを作っているということもおありなんでしょうね」(j)、「場所があるけど中身がないので中身は提供してほしい」(g)という、協力者(団体)にとってもサイエンスカフェの開催に協力するインセンティブがあることが伺えた。さらに、生涯学習の場を主宰している協力者(団体)もあり、こういった団体にとっては、サイエンスカフェも自らの団体が受講者に提供できる学びの場として開催していた(b, f)。そのため、広報物の作成や、開催場所の選定を担う、会場費を捻出するケースがあった。また、サイエンスカフェなどのイベントを開催して地域の人に来てほしいという会場関係者のニーズが伺えるケースも見られた(d)。運営者にとっては協力者の存在により開催場所の確保などが課題にならず、準備・企画への負担が低減できていた。また、外部の協力者(団体)と連携していないケースでは、企画運営には5人のスタッフが携わること、また小さい組織ではないことが言及され、開催に特段の支障のないことが伺えた(h)。

他方「忙しさ」が要因で、開催が途絶えた・開催数を減らしたケースは5件あった(d, e, f, g, j)。インタビュー記録からは、「大学教員でしたので、仕事が忙しくなってくるとだんだん後回しになっていった」(d)ことや、「暇がないって一番なのね。暇だったら普通に会いに行っています。普通に会いに行くとまたサイエンスカフェやってくださいって話になって、いつやります?ってなる。そういうコミュニケーションが切れている」(j)、「仕事(研究)との両立ぐらいだったらできるんですよ。そこにだんだんみんな年取ってくると家庭が入ってくるじゃないですか。そうなってくると、サイエンスカフェをやっている場合ではない」(e)などと、言及された。このケースからは属人性(特定の運営者・話題提供者がいなければサイエンスカフェを開催することができない)や、運営を担う後継者の不在が影響したことがわかった。さらに、会場が確保できなくなることと相まって開催が途絶えた事例も見られた。特に、これらは個人または個人々の集まりで開催する場合に顕著に見られた(開催が途絶えた・開催数を減らした5件のうち4件が該当)。ただし、後に運営者が新たに加わることで忙しさに起因する課題が解決されているケースも見られた。

3.7 開催資金

今回の調査の中で組織が主催する「組織」ケースは5件であった(a, b, g, h, i)。一方、個人・個々人の集まりで主催するケースは5件であった(c, d, e, f, j)。組織が主催する場合、予算を組むことが可能であり、運営資金に課題を抱えにくいと考えられる。他方、個人・個々人の集まりで主催する場合は運営資金に課題があると考えられたが、すべてのケースにおいて、開催に必要な資金を課題と認識しているケースは見られなかった。その理由として、いずれのケースであっても予算の有無に関わらず、経費をかけずに開催していたことが挙げられる。例えば、会場を自前で有していなくとも、開催場所は協力を得て、無料か(c)、参加費から捻出しており(b, d, e)、運営者側の負担はないケースがほとんどだった。また、集客にも注力しておらず、開催を周知することに費用をかけていなかった。開催を周知するためのチラシ作成や商業施設に配架するといった労力をかけずに、運営者や協力者の身近なところへの周知と自ら運営するホームページやSNSへの掲載など、いずれのケースも運営に経費が掛からないようにして(あるいは少ない経費で)実施していた。継続してきた中で、行政の補助金を得た事例は1件あったが、継続に行政等の支援が必要とするケースはひとつもなかった。多くが運営に要する費用は参加者が支払う参加費や自前で集めた寄付を充てており、参加費は無料のケース(c, f, h, i)もあった。また話題提供者にボランティアとして参加してもらっているケースも複数見られた(d, e, f, j)。また、主催者が「組織」であり予算を有していたとしても、とくに税金が原資となるような予算からは、飲食にかかる費用は捻出できないため、「個人・個々人」ケースと同様に、参加者から参加費を徴収していた(a, b, g)。また、サイエンスカフェ開催を予算ありきで実施していた場合には、組織の事情によって実施が左右される可能性が出てくるため、サイエンスカフェ開催の継続性を危ぶむ可能性があるといった言及もあり(b, g)、いずれのケースでも予算をかけない運営を意識して実施していたことが伺えた。

3.8 マンネリ化

マンネリ化について言及されたケースが5件あった(f, g, h, i, j)。テーマや企画の中身が同じであるケースや、話題提供者が特定の研究者ひとりに依存しているケースも見られた。また組織が主催するサイエンスカフェの運営者にとって、今後の継続性を意識して解決が必要な問題として捉えているケースは複数あった。「何年も同じ形でやってきているので新しさはなくなっているのかなっていうところ」(h)、「毎年のルーティンワークになってしまうとやっぱり飽きられるというか、頭打ちになるような気がする」(g)などと言及された。ただし、これらは「組織」が運営の主体となって継続するサイエンスカフェに特有の問題であると考えられる。他方、個人が運営する場合には、そもそも業務としてやっておらず、解決が必要な問題として捉えられていなかったと考えられる。

3.9 コロナ禍におけるオンラインでの開催

調査対象となった10件の継続的サイエンスカフェで、継続期間がコロナ禍(2020年~2022年)をはさむケースは6件あった(c, d, f, g, h, i)。そのうち3件がオンラインにより開催を継続した(g, h, i)。この3件はいずれも組織が主催し、サイエンスカフェは業務のひとつとして開催していた。オンラインでの開催について、インタビュー記録からは、遠方にいる方も参加できたという利点が挙げられた一方で、「本当は対面でやるべきだけど、イベントとして忘れられないようにとか、イベントを継続することを優先してとりあえずやった。ただ、参加者の顔が見えないので、どういう反応をしているのかよくわからない」(g)、「どうやってバーチャルに対話を作るかっていうのは割と頭を悩ませた」(h)などの言及があった。

他方、コロナ禍におけるオンラインでの開催が課題となり、開催が途絶えたケースが3件あった。いずれも個人または個々人の集まりで運営するサイエンスカフェである。開催が途絶えた理由として、「対面でやっていた時の良さが失われ」「面白くなくなった」(d)、参加者からの質問がないなど「ライブ感が失われた」、その場で開催することができなくなり「開催場所にとって協力する意味がなくなった」(j)、さらに、「オンラインだと(パソコンを持っていない)参加者にとって参加が難しくなる、対面で会うことができない」(c)などの言及があった。以上のインタビュー記録より、オンラインでの開催は「対話」や「双方向性」に代表されるサイエンスカフェの本来の実施意義が失われてしまうことが示唆された。翻ってこのような言及は、日頃から「対話」や「双方向性」を重視していたことが考えられる。実際に、運営者の思いとして「有益なる情報をいかに最大効率で伝えるかっていう場ではない」(d)ことや、話題提供者である研究者が「どうしてそうなると思います？」などと話しかけ、参加者の反応や、やり取りを意識していたという考えが多く聞かれた(j)。また、サイエンスカフェは「本当は対面でやるべき」(上述)であることや、オンラインよりも「対面での参加者を増やしたい」旨が言及された(i)。またオンラインの開催であってもチャット機能を活用する(h)、サイエンスコミュニケーターの方にファシリテーターを担ってもらうなどの工夫をしたという言及があり(i)、これらのサイエンスカフェでは「対話」や「双方向性」を意識しながら続いてきたことが示唆された。

4. 考察

4.1 京都府における「継続的サイエンスカフェ」の特徴

4.1.1 非研究者および協力者(団体)の存在

三島 他(2022)によると、運営者が「研究者」である場合、一般的に「話題提供者の選定・依頼」が容易い側面があると指摘される。京都府における「継続的サイエンスカフェ」において、運営者に「研究者」を含むケースは19件のうち10件と多数を占めていたものの、運営者が「非研究者」であるケースも9件であった。

学術機関が主催するサイエンスカフェの場合、組織内の職員が運営を担っていることがほとんどだが、このようなサイエンスカフェでは組織に所属する研究者に話題提供を依頼しやすいという側面がある。また、インタビュー調査からは、学術機関以外の「非研究者」が開催を可能としてきた背景が言及された。大学に所属する研究者が普段から利用していたお店で開催されていたサイエンスカフェの事例に見られるように、研究者の身近なところに「非研究者」の運営者が存在し、この運営者の協力によってサイエンスカフェが行われていた。また、別の事例では、サイエンスカフェの話題提供者を選んだり、依頼したりする際に、複数の学術機関が協力していた。これらの学術機関に所属する助教や准教授といった若手の研究者は、自身の研究について話す機会が乏しいという。サイエンスカフェの開催はそのような若手研究者に研究の話をする機会を作り、学術機関にとっても研究者の活動を発信するといったニーズを満たす機会であったことへの言及があった。さらに、「非研究者」と「研究者」が共同して運営しているケースでは、「非研究者」が生涯学習の場を主宰しており、2件の事例があった。これらは、「非研究者」が運営を担いながら継続的にサイエンスカフェを開催できた要素と考えられた。継続的なサイエンスコミュニケーション活動を行う方策について述べた中森(2017)によると、一要素として、協力者(団体)と「Win-Win」となる連携を取り持つことを言及している。本調査においても、生涯学習を主宰する協力団体(「非研究者」として運営に携わる)にとっては、自らの団体が運営する学びの場のひとつとしてサイエンスカフェを実施していた事例もあり、普段とは異なる参加者に活動を知らせる契機になったという。話題提供者の

選定や推薦に協力する学術機関にとっても、「一般の方と話をする機会」を若手研究者に提供する機会になるなど、双方にとって「Win-Win」となる連携があることが示された。

また、調査対象地とした京都府には、大学や研究所などが多数立地し、就業者数に占める研究者の数は多い。一般市民との接点も生まれやすいと考えられる。さらには、大学などが実施する公開講座など、市民への学びの場は多数開かれており、市民の学習ニーズや、学術成果に対する関心も少なくないと思われる。協力者（団体）と「Win-Win」な関係性に加えて、研究者の活動に寛容であるなど、サイエンスカフェの開催に親和的である京都という地域性が、サイエンスカフェの担い手として「非研究者」や協力者が存在する背景にあり、継続性に寄与した一因であると思われる⁵⁾。ただし、ここで示す「京都という地域性」は、京都府全域ではなく京都市およびその周辺地域を指すに留める。本調査で示した「継続的サイエンスカフェ」19件のうち京都市内で開催されたものが17件であり、インタビュー調査の対象とした10件のサイエンスカフェは、すべて京都市内で開催されたものを対象としたためである。

4.1.2 「特定」の会場を有する背景

三島 他 (2022) によると、「特定」の会場を有することは、中心となる運営者が「研究者」であることと併せて、サイエンスカフェの継続性を支える要素であることを示唆していた。福岡県における「継続的サイエンスカフェ」では、会場の「特定」/「不特定」は同数（各8件）であった。一方、本研究で調査した京都府における「継続的サイエンスカフェ」では、「特定」の会場を有するケースが19件中16件で、多数を占めていた。このようにサイエンスカフェにとって「特定」の会場を有することは、サイエンスカフェを継続的に実施するための強い要素になることが考えられる。開催場所に特定の場所を予定できることは、開催に合わせて会場を探したり、レンタルするために会場関係者と交渉する、また、会場のレイアウトを整えたりするなどの手間が省け、サイエンスカフェの開催にとって有利になりうると考えられる（朝野, 2008; 三島, 2022）。このため学術機関が母体となって開催しているサイエンスカフェでは、継続的な開催にとっての課題にはなりにくいと考えられた。他方、本調査の対象としたサイエンスカフェでも、運営者が自前の会場を有していないところが少なくなかった。この背景には、サイエンスカフェの会場として提供することに協力的なお店や協力者（団体）の存在が寄与していたと考えられる。

4.2 集客が課題とはならなかった背景

今回のインタビュー調査からは、参加者の確保や集客に注力していないことに言及する例が複数見られた。また、参加者が数人であっても開催を止めることなく継続的に開催していたケースがあることが分かった。特にこれらのケースでは、集客を目的としたり、人々の注目を集めたりするためのイベントとして開催していなかった。「あさひかわサイエンス・カフェ」を立ち上げた朝野 (2008) の報告では、サイエンスカフェを開催する際、「広く世間に周知してもらい、興味を持つ人が参加しやすくするために」広報に注力していたことがわかる。特に初回は、「より多くの人に認知してもらうこと」を念頭に置き、目標とする参加者を50名に設定していた。以上のことから、集客を意識していたと思われる。一方、本研究のインタビュー対象者は、このような事例とは対照的に集客に注力せずにサイエンスカフェを運営していた。森 (2016) は、大学で行われているサイエンスカフェを実施の背景や目的から、「大学広報モデル」「研究者自己研鑽モデル」「架け橋デザインモデル」の三つに分類し、「大学および大学の研究についての広報手段としてサイエンスカフェが位置付けられる」サイエンスカフェを「大学広報モデル」と定義している。本調査対象となった「継続的サイエンスカフェ」では、この意味で広報を目的に開催を継続するケースは見られず、「研究者自

己研鑽モデル⁶⁾ または「架け橋デザインモデル」⁷⁾ に該当すると考えられた。運営の母体に「組織」がある場合でも、サイエンスカフェの開催を始めた当初は広報的な意味合いを付随していたことはあったが、継続的に実施してきたことに対する運営者の意識には、組織の広報を主目的としていなかったと言及していた。このようなことから本調査対象の「継続的サイエンスカフェ」は、運営主体を問わず「研究者自己研鑽モデル」や「架け橋デザインモデル」に当てはまる、あるいは、その類型に近い形で運営されているサイエンスカフェと考えることができる。

このように、京都府における「継続的サイエンスカフェ」では、一定の参加者を常に集めつつも、人々の注目を集めたり、集客を目的にすることは関係なく継続してきたことが示唆された。また、運営者の思いとして「お客さん同士で話をしてほしい」ことや、「有益なる情報をいかに最大効率で伝えるかっていう場ではない」など、双方向性や対話を意識していたことへの言及が多かった。コロナ禍ではやむなくオンラインで実施していたものの、アフターコロナには対面実施に戻ったことから、科学に関わる話題について、参加者どうしや研究者との議論を楽しむ場にするへの意識が高かったこと、双方向性や対話を重視して運営していたと考えられる。このことは、サイエンスカフェの本来の意味合いを重視していたことが継続性の要素として寄与したと言えるのではないだろうか。それ故に、運営者にとって参加者数が少ないことは問題にならなかったと考えられる。

4.3 経費や労力をかけない運営

「小規模サイエンス・カフェ」のひとつであるペンギンカフェを運営する紺谷(2008)によると「個人や財力のない団体がサイエンス・カフェを始めることにはノウハウの欠如などによる心理的・物理的バリアーがある」と言及している。しかし、本調査の中では、サイエンスカフェの開催経費が継続性への障壁になったという言及はなかった。また「組織」ケースのように予算を確保しやすい環境があったとしても、予算が有ることが継続性に、特別に有利に働くことはないと考えられた。継続的サイエンスカフェの中には、会場を自前で有していなくとも、開催場所となる会場は様々な協力によって会場費をかけずに実施しているケースがほとんどだった。また、Web ページやダイレクトメールでの周知により自然と参加者が集まり、あるいは参加者が10人以下の少人数であっても開催していた。また話題提供者がボランティアとして協力しているケースも多くあり、少ない経費や省労力で実施することで継続的に開催してきたケースが多かった。

5. おわりに

本研究では、京都府における「継続的サイエンスカフェ」がどのように継続してきたのかを「課題」に着目して明らかにした。結果、コロナ禍での開催(オンライン開催)や、運営者や話題提供者の忙しさが「継続的サイエンスカフェ」にとって課題となり、継続性にも影響を及ぼしていた。他方、平山(2014)により、開催場所の確保や話題提供者の依頼など、サイエンスカフェの開催に共通課題とされていた内容は課題とはならず、開催が途絶える要因にはならなかった。また、参加者数が10人を下回る場合や、経費をかけずにして継続してきたケースが少なからずあることがわかった。さらに、「議論をすることが目的」であるなど、運営者が双方向性や対話を意識し、継続してきたことが示唆された。

三島(2022)によると、運営者が「研究者」であることや特定の会場で開催を予定できることが、サイエンスカフェの継続性を支える要素として示唆されている。また、協力者(団体)の存在がサイエンスカフェの継続的な開催に寄与することも指摘されており(中森, 2017; 小林, 2024)、京都府における「継続的サイエンスカフェ」にもこれらの要素は含まれる。しかし、運営に携わる「非研

究者」や協力者（団体）も存在し、学術機関職員や研究者以外の市民が、サイエンスカフェの運営および開催に携わっていたことがわかった。そして、コロナ禍における開催に際して、運営者の思いからは、双方向性や対話を意識していたことが伺えた。さらに言えば、調査した「継続的サイエンスカフェ」は集客や広報を目的に開催しておらず、科学に関わる話題を純粹に楽しんだり、参加者どうしや研究者との双方向性や研究者の研鑽を意識して開催されていた。これらが集客や開催経費が課題とはならず、継続性を支える要素であったことが考えられた。さらに、京都という地域性が開催場所の確保や話題提供者の選定・依頼に加えて、集客を容易にしていることも考えられた。

他方、サイエンスカフェの継続性には、運営者の内面的な動機も関連していると思われる⁸⁾。しかし、本研究ではサイエンスカフェの運営上の課題にどのように向き合っている（きた）のかに分析の視点を設けたため、主に捨象せざるを得なかった。また、「京都という地域性」を裏付ける調査までは本研究では行っていない。さらに、調査時点では拾い上げることができなかったサイエンスカフェの実践事例も存在する⁹⁾。これらは本研究の限界である。

本研究以前に、京都府にて開催されてきたサイエンスカフェの全体像を調査し、俯瞰的に記録した研究はなかった。今日に至るまでサイエンスカフェがどの程度行われ、いかに継続してきたのか、科学コミュニケーションの活動を振り返る上で有益になると思われる。京都府における「継続的サイエンスカフェ」に見られた特徴が、既存のサイエンスカフェや新たに活動を始めようとする運営者にとっての参考となり、京都府または他地域における今後のサイエンスカフェおよび科学コミュニケーションの持続ならびに発展の一助となることを期待する。

謝辞

本研究のために計 13 名の皆様よりインタビュー調査にご協力をいただきました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。また、本研究に関して貴重なご意見・ご指摘も賜りました。また本研究の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（22K18638, 23K25717）及び京都産業大学研究所・研究センター研究経費（F2301）の助成を受けて実施しました。

注

- 1) ただし、任意団体としての「科学カフェ京都」はこの時すでに存在していた。「科学カフェ京都」の当初の活動をサポートする形で、NPO 法人「日曜大学」が携わっていた。
- 2) 三島 他（2022）はサイエンスカフェの継続性を「複数年にわたって 10 回以上開催されている（いた）」と定義した。本研究でも「継続的サイエンスカフェ」はこの意味で用いる。
- 3) 2005 年より立花浩司氏により運営され、日本全国におけるサイエンスカフェの開催情報をインターネット上で収集・整理している Web サイトである。
- 4) 三島 他（2022）は「研究者」を「大学や研究機関に所属し、自身の専門性を持って学術研究に従事している人」と定義し、それ以外を「非研究者」と定義した。また、「運営者が特定の場所で開催を予定しているサイエンスカフェ」を「特定」の会場を有すると定義した。本研究でも三島 他（2022）に則り定義する。なお、本研究では「研究者」には、かつて「研究者」であった元研究者を含めた。
- 5) 京都府における「継続的サイエンスカフェ」の中心となる運営者には、「研究者」に分類したが、元研究者が運営を担うケースが 3 件確認できた。「非研究者」や協力者の存在と同様に、京都という地域性に起因すると思われる。
- 6) 〈研究者自己研鑽〉モデル：「研究者自身の研究力向上や自身の研究領域に対する市民の理解増進を目的」とするサイエンスカフェ
- 7) 〈架け橋デザイン〉モデル：「科学者と市民の架け橋となる活動のデザインすることを目的」とするサイ

エンスカフェ

- 8) 小林 他 (2024) では運営者へのインタビューデータよりオープンコーディングの分析手法を用いている。研究対象とした継続的に開催する「草の根サイエンスカフェ」の運営者である「生涯学習者」としての態度」が備わっていることを明らかにしている。
- 9) Web ページやブログを見る限りサイエンスカフェやサイエンスバー形式の催しであるのにも関わらず、サイエンスカフェ・ポータルには掲載されていないものもあった。その一例として、2009年7月～2012年7月より計21回開催された「呑みながら講義」(主催: Loki ACADEMICA, 協力: 井戸端サイエンス工房)がある。京都府における「継続的サイエンスカフェ」でありながら調査時点で拾い上げることができなかった。

文献

- 朝野祐一 2008: 「あさひかわサイエンス・カフェを立ち上げて: 科学で地域を盛り上げる試み」『科学技術コミュニケーション』 vol.3, 129-136.
- 江藤信一, 清水麻記, 鮫島祥子, 藤原昌子, 土屋潤, 伊藤綾子 2008: 「サイエンスカフェ『ばりカフェ』」『科学技術コミュニケーション』 vol.4, 31-39.
- 藤垣裕子, 廣野喜幸 2008: 「第3章 日本における科学コミュニケーションの歴史」藤垣裕子, 廣野喜幸 (編) 『科学コミュニケーション論』 東京大学出版会 39-61.
- 平山静男 2014: 「主催者から見るサイエンスカフェの成果と課題—主催者への質問紙と調査から」『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』 vol.3, No.2, 36-37.
- 廣野喜幸 2008: 「第7章 伝えることのモデル」藤垣裕子, 廣野喜幸 (編) 『科学コミュニケーション論』 東京大学出版会 125-141.
- 本間善夫 2010: 「SCCJ カフェ (2): サイエンスカフェによる科学コミュニケーション」『Journal of Computer Chemistry, Japan』 vol.9, No.4, 13-16.
- 川本思心 2019: 「包摂的/再帰的サイエンスコミュニケーション研究をめざして」『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』 vol.9, No.2, 12-17.
- 小林良彦, 吉岡瑞樹, 三島美佐子 2020: 「九州北部地域における草の根サイエンスカフェの広がり—『サイエンスカフェ@ふくおか』から生まれた二つのサイエンスカフェの開設動機と準備過程—」『サイエンスコミュニケーション協会誌』 vol.10, No.2, 74-79.
- 小林良彦, 坂倉真衣, 吉岡瑞樹, 三島美佐子 2024: 「草の根サイエンスカフェの開設・継続に必要な要素: 九州北部地域の三つのサイエンスカフェの質的研究から」『科学技術コミュニケーション』 vol.35, 13-24.
- 紺谷恵子 2008: 「小規模サイエンス・カフェの可能性と課題」『科学技術コミュニケーション』 vol.3, 149-158.
- 三島美佐子, 小林良彦, 吉岡瑞樹 2022: 「福岡県におけるサイエンスカフェの実践記録分析: サイエンスカフェの継続性に注目して」『科学技術コミュニケーション』 vol.30, 31-43.
- 水沢光 2008: 「第1章 英国における科学コミュニケーションの歴史」藤垣裕子, 廣野喜幸 (編) 『科学コミュニケーション論』 東京大学出版会, 3-20.
- 森玲奈 2016: 「なぜ大学がカフェイベントを行うのか?—大学主催サイエンスカフェにおける実施背景と課題を手掛かりに—」『日本教育工学会研究報告書』 vol.16(1) 433-436.
- 元木環, 加納圭, 水町衣里, 城綾美 2021: 「第5章 対話を支援する場のデザイン」加納圭, 水町衣里, 城綾美, 一方井裕子 (編) 『研究者・研究職・大学院生のための対話トレーニング』 ナカニシヤ出版 67-84.
- 中森まどか 2017: 「第7章 科学と社会を『つなぐ』 第3節 継続的なサイエンスコミュニケーション活動を行うには」独立行政法人国立科学博物館 (編) 『科学を伝え, 社会とつなぐ サイエンスコミュニケーションのはじめかた』 丸善出版 150-161.
- 中村征樹 2008: 「サイエンスカフェ 現状と課題」『科学技術社会論研究』 vol.5, 31-43.
- 崎尾均 2024: 「佐渡島におけるサイエンスカフェの取り組みと展望」『日本の科学者』 vol.59, No.8, 53-59.
- 標葉隆馬 2016: 「政策的議論の経緯から見る科学コミュニケーションのこれまでとその課題」『コミュニケーション紀要』 vol.27, 13-29.

杉山滋朗 2007: 「『サイエンス・カフェ』の歴史と理念を紐解く一定着しつつある新しい科学コミュニケーションのかたち」『化学』vol.62, No.2, 22-24.

渡辺政隆 2008: 「科学技術理解増進からサイエンスコミュニケーションへの流れ」『科学技術社会論研究』vol. 5, 10-21.

渡辺政隆 2017: 「序章 サイエンスコミュニケーションのはじまり」『科学を伝え、社会とつなぐサイエンスコミュニケーションのはじめかた』独立行政法人国立科学博物館（編）丸善出版 1-8.